

花 二 三

若山牧水

(翻译 陈焰)

多有人说梅花香。而我倒宁可说说沈丁花。因为梅花的好是一朵两朵地在貌似枯萎的树枝梢头上报新芽的时候最最好。而从花朵的盛开到凋谢这段过程，其景色实在是令人失望。并且到了这个时候才渐渐有一股香气，而这香气也要摘上一朵对着鼻尖才闻得到。真是扫兴。但是、连花儿开在何处，是在庭院树木的日荫里，还是在朝着阳光的小道旁都还没弄清楚，就已在似有非有的风中飘起了阵阵芳香的沈丁花香味，那才是真正春天的东西。让你感到舒服的是，它带着它的坚韧，即便是那些冷落的地方也会展现自己的身影。

不管怎么说沈丁花是属于日荫的花。而如要看在向阳的野地其香四溢的东西应该是油菜花了。有此花芳香的地方就必有与此花同色的蝴蝶在那儿等候。而且在这近处还会有麦田的青青绿色。并且青青的麦田上又必定还会飘来一两只云雀的欢叫声。

一两朵的梅花毕竟还是来报春的。但这很平凡，并不引人注目。然而有一种恐怕只在北方才有的花，同样也是来传达春意的叫作金缕梅的花。说它是花，其实也就只有粟粒那么大小，同样正好也是在冬天枯萎的细细软软的树枝上盛开的粒粒黄黄的小花。树根还埋在尚未融化的冰雪里呢，细细的横纵交叉生长着的树枝上就已爆出花苞开起了花。想必这对于经历了漫长严冬的人们就一定会为这不起眼也不热闹的金缕梅花而动情了吧。记得在东京植物园甘薯先生碑旁也有一棵这样的树。

同样在北方还有被称作田打樱的辛夷花也是一种很好看的花。花形与木莲花相似，但比木莲花要小好多，不像木莲花那般佛教气味十

足，颜色呈白色。它的枝干也不像木莲那般粗软，而是像金缕梅那样的细，柔韧却还耐雪寒，盛开在没有一片叶子的光溜溜枝梢上，朵朵雪白竞相争艳。是不是由于枝干的柔软，故当花期最盛时，累累花朵多数才开在低垂下来的枝子上。它开得不像金缕梅那般孤零，看上去实在是有一股舒畅之感。听说是在冰雪终于融化冰封已久的稻田开始露出面孔时开的花，由此而得了这别名。的确这朵朵花姿都好像正在互吐心语。我仍然想起在进入小石川植物园温室后通往对面樟树荫的那条道上，夹在列队成行的木瓜树之间花儿盛开的那一棵树的身姿。

在下垂的树枝上开花的花中，垂枝樱花是我喜欢的一种，从骏河湾的深处、静浦连接海湾的入江岸有一个叫三津的渔村，这里的高处有一座面朝大海的古寺院。寺院门的两旁相对着有两棵巨大的垂枝樱花。在五、六年前我发现它们后就每年都要去看。是在去年吧，在两人环抱、三人环抱的大树周围垂下的细细树枝下的草丛里，平时常常开着散发着香气，润泽的淡红色的花，而偏偏这时却甚少，心真感孤寂。但是就这事赐教了那里的一位僧人，他苦笑着说，今年也不知为什么，从这后山到山的深部，红腹灰雀实在是多，所有的花蕾都让它们吃得精光了。呵呵，当问他灰雀也吃垂枝樱花吗？回答是，吃，那可是它们最爱吃的东西了。

1 甘薯先生……青木昆阳（1698-1769）。江户时代一位为解决饥馑，极力普及推广种植甘薯的代表人物。

.....
若山牧水（1885—1928）：原名若山繁。出生于宫崎县。酷爱酒、旅行。作为自然主义歌家他代表了一个时代。



梅の香りを言う人が多いが、私はむしろ沈^{ちん}丁^{ちょう}花^げを挙げる。梅のいいのは一輪二輪ずつ枯れたような枝の先に見えそめた時がいいので、真盛りから褪^あせそめたころにかけては、まことに興ざめた眺めである。そしてその頃になって漸く匂いがたってくる。もっとも一輪摘んで鼻の先に持ってくれば匂うであろうがそれでは困る。どこに咲いているのか判らない、庭木の日蔭に、または日向^{ひなた}の道ばたに、ありともない風に流れて匂ってくる沈丁花のかおりはまったく春のものである。相当な強さを持ちながらどこか冷たいところのあるのも気持がよい。

どちらかといえば沈丁花は日蔭の花。それを日向の広場に匂うものとして見るべきものに菜の花がある。この花の匂うところには必ずこの花と同じ色の蝶々がまっているであろう。そしてその近くのどこかには麦畑の青さがあるであろう。そしてまた必ずその上には一羽か二羽^{ひばり}の雲雀の聲が漂うていねばならぬ。

月並でも梅の一輪二輪はやはり春のおとずれを知らずのものである。それほど目立つことなく、そして恐らくこれは北国に限られた花かも知れぬが同じように春意を伝えるものにまんさくの花がある。花といってもほんの粟粒ほどの大きさで、同じくこまかなしなやかな冬枯れの枝のさきにつぶつぶとして黄いろく咲きいづる。根はまだ雪や氷にとざされながら、細々として入りみだれた枝のさきに咲き出づる。永い間雪に包まれた人たちにとってはさぞかしこの見栄^{みば}えのせぬさびしい花に心を惹かるることであろう。東京の植物園にも甘藷¹先生¹の碑のあたりに一本だかあったとおもう

同じく北国で田打桜と呼ばれている辛夷^{こぶし}の花も気持のいい花である。木蓮に似ているがそれよりずっと小さく、木蓮の仏臭なく、色は白である。

木蓮のようにぶよぶよした枝でなく、まんさくに似た細い枝の、しなやかでしかも雪に耐うる強みを持って落葉しはてた枝のさきに白々と咲くのである。枝がしなやかなせいか、花の真盛りとなると多くみな枝垂れて咲く。まんさくの寂しさなく、いかにもうららかな眺めを持つ。雪漸く消えて久し振に田圃の地面が見えだすころに咲くというのでこの異名があるのだそうだが、いかにもそれらしい心を語る花である。やはり小石川の植物園の温室から向こうに入った樟くすのきの木の下、立ち並んだカリンの木の間にまじって一本咲いていた姿を思い出す。

枝垂れて咲く花の中では枝垂桜も私の好きな一つである。駿河湾の奥、静浦から江の浦に続く入江の岸に三津みとという漁村があり、その海に臨んだ高みに何とかいう古い寺がある。その門のところに相對して立った二本の巨大な枝垂桜がある。五六年前に見つけてから毎年私は見に行った。昨年であった、二抱え三抱えの大きな木のめぐりにこまかに垂れ下った枝のしげみにいつもはしっとりと咲き匂っている筈のうす紅いろの花が、その時に限って甚はなはだ少なく、妙にさびしい気がした。が、そのことをその僧に言うと、僧は苦笑しながら、今年はどうしたのかこの裏山から奥にかけて鶯うその鳥が誠に多く、みな彼等に花の蕾をたべられてしまいましたという。へええ、鶯は桜の蕾をたべますかと訊くと、ええもう大好物ですとのことであった。

1 甘藷先生……青木昆陽（1698-1769）の通称。

.....

本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。